

2020年6月7日 大井バプテスト教会 礼拝説教

説教題「隣人と神につながる命」ルカによる福音書 11章 5～13節

主任牧師 加藤 誠

**「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。」(ルカ 11・9～10)、「まして天の父は求める者に聖霊を与えてくださる。」(同 11・13)**

例年6月10日前後の日曜日には「あけぼの幼稚園創立感謝礼拝」をささげていますが、今年は残念ながら礼拝堂に集い、いつものような形で礼拝をささげることができません。ぜひそれぞれの場所で、教会付属あけぼの幼稚園の働きを覚えて祈りを合わせたいと願います。

三月には何とか卒業式をして子どもたちを送り出すことができましたが、四月には新型コロナウイルスの感染拡大のため、入園式を断念し、この二ヶ月間保育を休まざるをえませんでした。ようやく先週6月1日から自由登園という形で、子どもたちは二つのグループに分かれて、毎日半数ずつ登園をし始めています。園庭から子どもたちの声が消えた二ヶ月間はとても寂しい毎日でしたが、主人公である子どもたちの元気な声に戻って来て、にぎやかさを取り戻しつつあるところです。

けれども、大きな声で思い切り賛美歌を歌うことができない、先生やお友だちと手をつないだりハグしたりできない、また、肩を寄せ合ってお祈りすることもできない…など、これまでの保育が大きく制限されて、教師たちは戸惑い、緊張し、試行錯誤の毎日です。そのような中でも教師たちは、幼稚園で過ごす時間が子どもたちの笑顔あふれるものとなるようにと願い、日々心を砕いて保育にあたっています。どうか困難の中でささげられている幼稚園の働きを覚えてお祈りを願います。

さて、登戸駅でスクールバスの停留所に並んでいた小学生や大人が犠牲になった悲しい殺傷事件から一年。亡くなった小学校六年生のAさんが通っていたカトリックの小学校で追悼ミサが行われたというニュースの中で、Aさんのクラスでは毎朝出欠を取る時に、担任の教師がAさんの名前を呼び、クラスの子どもたち全員で「はい」と答えることを卒業まで続けていたと知りました。Aさんの名前を呼ぶ担任や、返事をする子どもたちにとってはどれほど辛いことだったろうかと、胸が深く痛みました。そのような痛みを覚えながらも、それでもAさんの名前を呼び続ける意味はどこにあるのだろうか…と考えさせられたのです。一つ、思い至ったのは、「私たちが心の中に自分以外の誰かの命を受けていくとき、私たちは神の前に共に生きる命とされるのではないか」ということです。自分以外の誰かの「痛み、悲しみ、叫び、悔しさ」に触れて、その人を想い、共振する部分が心の中に生まれていく時、私たちは「隣人とつながり、神とつながる命」とされていくのではないかと。

私たちの心の中はふだん、自分と自分の家族のことで精いっぱいであるように思っています。世の中で毎日起こるいろいろな悲しみや痛みをニュースで知るとしても、

たいがいのことは次の日には忘れてしまっている。そんな私たちが毎日、一人の命のことを必ず思い起こすように促されていく時、「自分に与えられた命の意味は何だろう」「今日という一日をどう自分は生きるのだろうか、用いるのだろうか」と考えざるを得ない。そのようにして、私たちが「心の中に自分以外の誰か」を受けて、その命とつながられていくとき、私たちは「神の前に、人とされていくのではないかと、考えさせられるのです。

さて、今朝はルカ福音書 11 章 5 節以下を開きましたが、この 11 章の冒頭で「主よ、祈りを教えてください」と尋ねた弟子たちに対して、主イエスは「主の祈り」を教えられ、そして今ご一緒に読んだ「たとえ話」をされました。「真夜中に隣の家のドアをたたく人のたとえ」と呼ばれている「たとえ話」です。ここには真夜中に隣の家のドアをたたく人が出てきます。「こんな夜中に、いったい何時だと思ってるんだ！」と怒られながらも、「パンを分けてください」とドアをたたき続けるのです。興味深いことに、この人自身はお腹をすかせているわけではありません。この人は自分のためではなく、自分の家に真夜中に訪ねてきた旅人に出すパンがなく、その旅人がお腹をすかせているから、「パンを分けてください」と、怒られても怒られてもドアをたたき続けているのです。自分が食べるパンではないのに、怒られる。損な役回りです。計算で考えたなら、そんな役割、とても担えません。でも、その人は必死にドアをたたき続ける。なぜか。この人の心の中に、お腹をすかせた旅人が「入ってしまったから」ではないのでしょうか。自分の家に、真夜中に訪ねてきた旅人。「自分に関係ない」とドアをあけずに追い返すことも出来たのにもかかわらず、この人はドアを開けてしまった。そして、そのお腹をすかせた旅人の窮状に触れてしまい、その存在を心の中に受けとめてしまった。それゆえに、この人は、お腹を空かせた旅人と共に「一緒になってドアをたたく人」にされたのでした。最初に真夜中にドアをたたいた「一人のノック音」は、こうして「二人のノック音」になっていったわけです。

そして主イエスは「これが祈りというものだよ」と弟子たちに教えられたのです。「求めよ、探せ、たたけ」。そうすれば「与えられ、見つかり、開けてもらえる」。そして、このような祈りに導かれた者に「天の父は聖霊を与えてくださる！」と。

「自分の願いごとを必死に願う。それもいい。でもね、祈りというものは、あなたが、あなた自身の願いごとではなく、自分以外の人の命のことで、必死に神に向かってドアをたたく者にされること。あなたの心の中に、誰か他の人の必死の叫びや悲しみや痛みが入って、あなたの心が共振し、あなたがその人と一緒に、神に向かって祈る者とされること。神はそのような祈りを喜ばれて、あなたは聖霊の注ぎを体験するだろう！」と。そう教え励ましてくださったのです。「一人の祈り」が「二人の祈り」へ。「神さま、助けてください」と「二人が祈る者」とされていくところに、聖霊は豊かに注がれることを、主イエスは教えてくださったのでした。

先週、私たちはペンテコステの礼拝にあずかりました。その私たちの祈りは、自分以外の誰かの命とつながり、神さまにつながる祈りになっているのでしょうか。「何を」を、求め、探し、門をたたくのか。その「何を」が問われているのです。